
ホシノソラ

オシノ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ホシノソラ

【Nコード】

N1598Z

【作者名】

オシノ

【あらすじ】

駅前で道に迷った少女と出会う主人公。人の良い男は、良く知らない少女の道案内をすることになった。案内した少女は探偵、友人はこすぷれいやー。片田舎で起きる奇妙な事件。天才ではない――凡人である少女探偵による、チョット変った事件解決。

僕が大学に行こうとすると制服を着た少女が立っていた。

駅前には必ずある、周辺の地図が描かれた看板の前に。

大人びた容姿からしておそらく高校生、中学生という事はないはずだ。

黒い冬服のセーラー服に赤いスカーフ、そして同じ色のストッキング。

少女は、その前で何度も何度も首をかしげる。

道が解らないのだろう。

拳句の果てには、地図を様々な角度から見はじめた。

しゃがみこみ下から見上げたり。右から覗き込んだり、逆から見たり。

だが地図とは変面に描かれた絵であり、立体ではないので角度をいくら変えようが迷い人の行く先を示してくれることはない。

僕は少女のそんな様子を見かねて話しかけた。

「ねえ君、行きたいところあるの？」

「……………」

首をこちらに向けて回し、僕をジーツと見つめる。

きれいな瞳だった。人形の顔にはめるために造られたガラス玉のように。

変な間があく。

話しかけたのは失敗だったかもしれない。

僕の勝手なおっせかいだったのだ。

それを感じた僕は、

「えーつと、余計なお世話だったかな」と言う。

だが彼女は「実は雨宮大学に行きたいのですけど」と目的の場所を僕に説明。

勘違いだったのだろうか。

「ああ、それだったら簡単だ。目の前にあるこの道をまっすぐ行けばいいよ」

「まっすぐですって……はあ？」

いぶかしげな顔で僕を見つめる。

「！？」

「……………」

「……………」

少女の顔は不細工ではなかった。

が、今の顔は見れたものではない。

口を歪ませ、眉間にしわを寄せ、左の眉をつり上げている。

ひと昔前のヤンキーのような顔、要は不細工な顔をしていた。

何だその顔は、何が気に入らないんだ。僕が嘘をついているとも言うのか。

親切で話しかけてあげたのにとんだ仕打ち。やはり、なれないことはするものではない。

しかし、一度乗りかかった船は簡単には降りられない。

「……ハハハ。良かったら案内しようか、僕の通ってる大学だし」
たぶん僕の顔は、すごく引きつっている。

それを聞いた少女は、

「あー、雨大の学生さんでしたか。これは失礼しました」

ニコツと笑って返答。

なんとなくだけど、閉じられたまぶたの奥の目は笑ってないような気がした。

作り物の笑顔。

たぶん気のせいだろうけど。

——雨大とは、僕の通ってる大学である雨宮大学の略である。

「ハハハ…」

なんで彼女はあんなしかめっ面をしたのだろっ、ナンパされなくても思ったのか。

女子高生に自己紹介をされた。

「私は雨宮星空と言います。天の星、空と書いてソラと読みます。ヨロシク」

「僕は鈴木だよ。よろしくね」

それを聞いた星空の顔が一瞬、また不機嫌なものになる。

「下の名前は？」

「えッ、なんで」

「教えて下さい。私は教えたのに不公平」

僕が名前を言わなかったのが気に入らなかったようだ。

あまり言いたくないからわざと名前を伏せたのに、なんて空気の読めないヤツ。

僕は自分の名前にあまり良い思い出がなかった。

「…聖夜」

聞こえるか聞こえないくらいの小さな声でボソツと言う。

「エッ？」

右耳に手を当てて、聞こえないと言ったジェスチャーをする少女。

「聖夜だよ！聖なる夜と書いてセイヤだッ！」

それを聞いた星空はニコツと笑い、

「いい名前ですね。ロマンチックです」と言ってくれた。

「そうかな。なんか照れるな」

僕の気にしすぎだったかもしれない。

この名前のせいで幼い時に少し苦労した。今思うとそんなに気にするようなことじゃなかったかもしれない。

けど無意識に名前の部分だけ伏せてしまう癖がある。

少し神経質になりすぎていたんだ。

褒められたらなんか気が楽になった気がする。

僕は、そのまま歩きながら話す。

そんな話をしていると、今度は少女に、

「そうだ。クイズしても良いですか？」

と聞かれた。

「ああ、別にかまわないよ」

何でいきなりクイズなんかするんだと思ったけど、まだ高校生の女の子だ。遊びたい年頃なんだろうと納得した。

星空は空気をスウと胸の奥まで吸い込む――

「では問題いきます。偉い人がラスベガスやマカオ、シンガポールで会社の金を使い込んだことが原因で、トイレットペーパーの芯が太くなり実質的な紙の量が減った（消費者の負担が増えた）会社と言えばエリエールですが、八十年代の少年漫画誌でギリシャ神話をモチーフとした、車田正美先生による傑作漫画の名前は、聖闘士ツ…何でしょうか？」

「……………」

僕はあっけに取られた。

そして、息もつかせぬ間に、

「プ————ッ。時間切れー。正解はセイヤでしたー。っーかなんですかその名前。田舎の売れないホストですか？オモシロすぎて、私ペガサス流星拳打てそうなんですけど！ププッ…アハハハハハ」

と言う。

「……アハハ、おもしろいですか…それは良かった。ところで問題にあったエリエールの話、聖闘士星矢と全く関係ないよね。それとエリエールは商品名であって会社名ではないよ」

ムカつく。

なんてムカつくガキだ。

が、

相手は高校生、まだ子供だ。落ち着いた対応をしないとイケない。大学生としてふさわしい大人としての行動を。

見せてやろう、これから社会人になる人間の知恵を。

示そう、人生の先輩としての模範を。

例えば、「高校生活は、楽しいかい？」とか「今日は大学見学に来たのかい？」とか聞けばいいんだよな。

それで間違いないよな。

まずはこんな質問でお茶を濁す。

「ところで君は何処の高校に通っているの？」

「フハハハ、アハハハハ——ッ。アハハハハハハ——ッ

！！」

「……」

全く聞いてねえ。

目の前にはアスファルトの路面に背中から転がり、腹を抱え大笑
いする少女。

ああ、これが腹を抱えて笑うってことなんだな。

そのもつともなる例を見た気がする。

さらに彼女は大笑いしながら、先程問題にもなった、不朽の名作
である少年漫画のオープニングを歌っていた。

アニメの主題歌を歌う行為を見て、相当馬鹿にされていることを
確信した。

どうやら気を使う必要はなかったらしい。

今日、僕は会ったばかりの女の子に自分の名前を大爆笑された。
なんて失礼なヤツだ。

「フヒー、フヒー、苦しい。マジで苦しい。ちょっと聖夜、あん
まり私を笑わせないで下さい」

「面白いことを言った記憶が全くないのだけれど……。っーかかい
きなり下の名前かよ」

「親しみを込めてです。私のことも星空でかまいませんよ」

「親しみって言うより悪意しか感じないぜ。星空」

雨宮商店街にて

まっすぐな道を歩く。

大学までの道。

駅前の商店街通りの名称である【雨宮通り】の看板が見える。

入り口に惣菜屋、店先でおばちゃんが品物を売っている。

コロッケー一つ百円、メンチは百二十円。

左に顔を向けると靴屋。赤地に黒で書かれた閉店セールのポスタ
ー。

僕が入学した時から閉店セール。

聞いた話だと十年以上前からやってるらしい。

きつと自分が卒業した後も閉店するするサギを行っていくのだろ
う。

後ろの方から、何か来る気配がしたので振り向くと、

——ビュッ！

「オワッ！？」

自転車に乗ったおばちゃんがすごい勢いで、僕の右腕のヒジギリ
ぎりの所を通り過ぎた。

とっさの反応で避けると、隣にいた星空にぶつかりそうになる。

「大丈夫だった？」と彼女に聞くと、首をコクコクと縦に振って
答える。

八百屋の兄ちゃん（黒人の若者）が「ヤスイヨー！ヤスイヨー！」

と声をあげ、

そこで主婦が夕食の材料を買う。

今は不景気だ。潰れる店も多い。大手チェーン店が幅を利かすこ
のご時勢に、ここまで活気がある商店街は珍しい。

一つ一つの店の規模は小さくても、

この商店街には、安くて品揃えの良い大きな会社に対抗できる力
があるのだろう。

そして、ここには全国にチェーン展開する喫茶店もある。
大きな会社と小さな個人店、この場所では共存もしているのだ。
ちょうどその喫茶店の前で星空が足を止めた。

「ちょっと疲れちゃいました」

「え？」

まだ、駅からほとんど歩いてないんだけど。

「このお店で、休憩して行きませんか？」
と聞かれた。

そう言われてみると、なんとなく顔色が悪いような…悪くないよ
うな

話してるだけだと明るい感じがするんだけど…表情が無いと言っ
か、目が笑ってないというか。

読めないヤツだ。

「あー、そうだね。調子悪いんじゃないね。じゃあ休んでい
こうか」

「はい、ご馳走様です！」

「!？」

（え——ッ。僕がおごるのかよ!？）

「では、中に入りましょう」

星空はそう言って軽い足取りで入店。

「……………」

僕は考えた。

まあ、相手は高校生だから年上である僕が代金を持つことは妥当
だ。

なんか腑に落ちないけど。仕方ない。

少し間をおいて僕が入店すると、星空はすでに注文を終えていた。

「もう、遅いですよ。じゃあ、先に行って席を取っておきますね」

「ごめんごめん。注文したらすぐ行くから」と言って僕はコーヒ

ーを頼んだ。

注文を聞いた若い女性の店員さんは元気な声で、

「ハイ！ありがとうございます。では合計で二千百四十円です」

「うわっ！？値段高ッ！？」

それを聞いた店員の笑顔が引きつる。

「いやそういった意味じゃなくて……もう一回確認してもらって良いですか？」

いぶかしげな顔で注文の内容を確認する。

「ええと、ホットミルクとホットドックのLサイズ、アイスコーヒーとシフォンケーキ、それとコーヒーで二千百四十円です」

——あの女。

どれだけ注文しているんだ。

「アハハ……」

僕はお金を払った。買った分の代金を払う。コレは社会のルールだ。

「ありがとうございます」

この店の店員より、星空から聞きたい言葉である。

「こっちです。こっち！」

「……………」

「なんでしよう？」

「いやあ、君。いっぱい注文してくれたねえ」

「えへへ」

なぜ照れる。

「この食いしんぼさんめ
軽いいやみ。」

「あんまりほめないで下さいよ」

まったくほめてねーし。

「おいしい？」

「あー、イマイチ」

——ビキビキッ！

僕のこめかみに青筋が走る。

人にご馳走してもらっておいで、おいしいの一言も言えんのか最近の若い奴は！

自分も大した歳変らんけど。

「ところで星空。僕このままだと午後の授業に遅れちゃうのだけ
れど」

「へえー、それは大変ですね」

全く感情がこもっていなかった。

「急いで食べてもらっていいかな」

「いやです。食事はゆっくり味わって食べるものです」

「いいから、早く食べよ」

「人生急いでも何も良いことはありませんよ。急がば回れです」

「急がないと授業に遅れるんだよ！」

無理やり口に、食べてる途中のホットドックをつめこむ。

「何するんですか！？」

「食事時間、時間短縮のために手伝ってやってるんだ」

「無理無理、無理。こんな大きなソーセイジ食べられない」

「じゃあ、注文するんじゃない！」

「飲み物、飲み物！喉が詰まる」

「ほれ」

「熱ッ！？こんな熱くて、ドロドロしたミルク飲めません」

「ほれ、じゃあアイスコーヒー飲みなさい」

「はい」

「シフォンケーキは没収っ」と

「この盗人めッ！」

「もとは僕の金だ！」

——「お客様、店内ではお静かにお願いします」
店員の人に怒られた。

「すみません」二人声をそろえて謝る。

食べ終わるとトレイの上に食べ終わった食器を乗せ、星空と一緒に片付けた。

星空のお友達

ああ、完全に遅刻だ。この女のせいで。

授業の途中で教室に入っていったらヒンシユクものだろう。

だから今日は休みだ。

大学生で言うところの自主休講。勝手に授業を休むことにする。

商店街の端まで来ると、人通りも少なくなってきた。

通り出口の近くには、若者向けの洋服屋と小さい映画館がある。

その隣には、雑貨屋があり。

自転車に乗った小学生が集まってきていた。

商店街を出ると、住宅街だ。

左手にドブ川を見て、川沿いにずっと歩いていくと目的地の大学に着く。

星空はずっと話していた。

僕が質問する間も無いくらいずっと――

しばらく歩くと、大学の正門に着いた。

そこには、腕を組んだ女性が立っており、こちらに気づくと目線を送ってきた。

んん？その前に髪の色がおかしい。

――銀色だ。

外国の人？

そもそも、髪が銀色の人種なんかいたっけ。

そんなことを考えているうちに、銀髪の女性がこちらに来る。

僕には、あんな変な髪の色をした人間は知り合いにいなかったの

で、

「星空の知り合い？」と聞くと彼女はコクコクと頷いた。
知り合いらしい。

やがて銀髪女は、僕らの目の前に来ると、「遅かったじゃない。

星空」と話す。

「道に迷ってしまいました」

と星空はそれに答える

「またなの！？でも、それにしても遅かったじゃない、心配したのよ」

「そこに居る人と一緒にチョット休憩していました」

「休憩？何してたの」

「はい、大きいソーセージを無理やり食べさせられたり」

「！？」

「熱くてドロドロのミルクを急いで飲まされました」

「ちょッ！！？」

「すごく強引でした」

「キキキキキ、…鬼畜プレイ！！」

おかしい、表現の仕方が絶対におかしい。

この一連のやり取りを聞いていた僕は、

——「チョット、何言って…」

会話を止めようとしたが、

「この変態、鬼畜野郎がッ！」

間に合わなかった。

銀髪女がつかみかかって来たのだ。

「誤解だ！」と僕にかかった濡れ衣をはらそうとすると、

「言い訳してんじゃねえ！」と怒られた。

「してねえし！ていうかアンタ、この女子高生と知り合いなの？」

「はあ、女子高生？ 星空はこの大学の生徒よ！」

「え——ッ！？ 大学生かよこいつ！ ていうかなんで制服着てるんだよ！？」

「今はそんなこと、どうでも良いでしょ！」

「良くない！ そのせいで僕がご馳走するはめになったんだ！」

女子高生だと思ったからおこった。

僕だってお金がないんだ、正直なところ見栄を張っていたんだ。だがそれを聞いた銀髪女の顔はますます鬼の形相になる。

「女子高生だから大きいソーセージと熱いミルクをご馳走してやったってわけかッ！？ このロリコン女子高生マニアがッ！」

「ちよと待て！ あんたは誤解している。僕とあんたの考えているニュアンスが違うんだ」

「当たり前だ！ 変態の考えている事なんか解ってたまるか！」

——バキィ！

殴られた。

グーで。

「痛たたた……」

何でこんな仕打ちを受けないといけないんだ。

「立て！ 制服マニアの変態め！ 肅清してやる！」

「あわわ、どうしてこんな事に」

今日は厄日だ。

女子高生探偵

僕が一発殴られたところで、星空が銀髪女を止めてくれた。と言っても星空が原因なので止めて当然なのだが。

「いやー、ごめんね。なんか私、誤解してたみたいで」手を合わせて僕に謝ってきた。

「いえ、別に…」

僕はそっけない感じで返事を返す。

「言ってくれば良かったのに」

「……」

僕は、必死に説明していた。

解りやすかったかどうかは別として。

「ホントごめんねー」

「いえいえ、全然気にしてませんよ。ところでなんですかその髪の色。外人なの？」

「ああ、これね。私、レイヤーなの。コスプレする人ね」

「へえ」

そういえばこんな噂を聞いたことがある。

テレビや雑誌で取り上げられてる美人コスプレイヤーがこの大学にいるってことを。

コイツの事かもしれない。

「で今度コスプレするアニメのキャラが銀色の髪をしているの。」

本当はウィッグでも良かったんだけど、今回はチョットこだわって見たの！」

「へえ」

「あはは、でもチョット目立ちすぎちゃって困ってるんだ。変だよ、こんな色の髪」

「いや、スゲーカッコいいですよ」

「ホントに？」

「そのスクラップ三太夫のコスプレ」

「なんだと！誰が、頭が銀色のバケツでできているポンコツロボ
ットだ！」

「やるのか！」

まさに一触即発。

「だいたい、そんな普通の服、さえない顔、普通のスニーカー履
いてるダサい男に言われたくありません」

「普通の服を馬鹿にするな！貧乏大学生がそんなに良い服買える
か！」

「安い服でも、こーでいねーと次第だと思っけど」

「変な髪の色しているよりマシだ！」

「このヤロー！」

「まあまあ、落ち着いてください」

僕らのやり取りをみていた、星空が仲裁に入る。

「ちよつと、熱くなりすぎたな。申し訳ない」

僕が謝ると銀髪女も、「そうね、私も謝るわ」と言った。

「法学部一年の鈴木聖夜と言います。よろしく」

「英語学科のレインです。よろしくね」

「は？」

「レインです」

なんだその韓国の男性アイドル見たいな名前。

「本名ですか？」

「えっ、違うけど」

「本名を名乗れ」

「いやです。良いじゃないハンドルネームで、アンタの名前も似

たようなモノでしょ」

「僕の名前のセイやは、ハンドルネームでもペンネームでもない。本名だ！」

「うわー、細かい。キモいわ。どうでも良いじゃないそんなこと」

僕の目を見ていない、そっぽを向いて話している。ホントにどうでもいい感じた。

「本名とハンドルネームと一緒にすることは、細かい事じゃねえ」「へー、それはスミセンデシター」

棒読み

「くッ…」

このまま話していると、また掴み合いのケンカになりかねない。僕はいったん距離をとると、星空に話しかけた。

「クソッ！美人で性格がいい女なんて都市伝説だ。そんなもの少年漫画にしか出てこない」

「チョット待って下さい、そんなこと言ったら私も性格悪いってことですか？」

「自分のこと自分で美人って言うだけでも驚きなのに、お前が自分自身で性格良いと思っていることにドン引きだ」

「いやあ、辛口ですねえ」

「今日一日で人間不信になったよ」

「まあまあ」

「ところでアンタこの学校の生徒だったんだな」

「そうです。言ってますでしたっけ？」

「言ってねえよ。ていうか自分の通ってる大学までの行き方が解らなくなるのか。普通」

「方向音痴なんです」

駅からこの大学までは、一本道だ。ただ道が解らないんだ。

「あとなんでセーラー服を着てるんだよ、ここは大学だぜ？」

「これは制服です」

「いや、見れば解るけどそんなの」

学校の制服ってことだろ。

「ああ、失礼。そういうことではなく、仕事着ってことです」

「……………えっ？」

セーラー服が仕事着。

彼女が着ている制服は、パツと見良くてきた高そうな生地なので一般的な雑貨店で売っているようなモノには見えない。

お遊びのコスプレで使うようなペラペラな生地の安物ではないのだ。

おそらくどこかの学校指定のセーラー服だろう。

しかも、クラシックなデザインから、歴史の古いお嬢様が通うような学校のモノではないか。

大学生なのに学校指定の制服を着て仕事。如何わしい商売しか思いつかない。

女子高生○○

まだあるのだろうか

援助交際

僕はなんとコメントすればいいのか。

ていうか聞かないほうが良かったんじゃないのか。

いやまて、結構軽い感じで話してきたから、そんなに重い話じゃないのかもしれない。

メイド喫茶ならぬ女子高生喫茶みたいな。

セーラー服で喫茶店のウェイトレスしてるんですう。みたいな。

聞いてみるか。でも変な雰囲気になるのはいやだ。

本人にだって言いたくないことがあるだろう。

そんなこと聞くのはどうだろうか。

「ちよつと、何想像してるんですか？」

「…いや、なんでも」

話を切り出しづれえ。

「何か如何わしいことを想像していませんか？」

「えっ、違うの？」

「違いますよー、私は探偵なんです」

「は？」

探偵が仕事って何？

なんで仕事着がセーラー服なの？

いろいろな疑問が僕の頭に浮かんだ。

学食

大学生ってなんだろう。

——いわくモラトリアム

——または大人になるための執行猶予期間

——成人するまでの準備期間

——ただ遊んでいるだけ

どんなにキレイな——いや適当な言葉を並べたとしても人生の中で一番輝いてる、すばらしく充実した時間ではなからうか。

昨日のこと。この雨宮大学の生徒である星空をこの大学に案内した。

なぜ自分が通ってる大学の道案内を、大学の在校生である星空にすることになったのか。

字面にすると解りにくい。自分で言っているつもりでも訳が解らない。

解りやすく説明すると——

普通の人間は自分の通ってる学校の道順を忘れたりしないのだけれど、とんでもなく方向音痴な星空さんは大学までの道のりが解らなくなってしまったのだ。

学校までの道のりを案内した御礼をしようということで、星空に呼び出された。

大学生のための学食という事で結構でかい。

何と言ったらいいだろうか、

でかさとしては、巨大ショッピングモールの食べ物屋がたくさん入っている場所。

何種類ものお店、それぞれの人が好きな店で食事を購入し、ショッピングモールに用意された広いスペース、そこに置かれたテーブルで食べる場所と言ったら解るだろうか。

解りにくいか。

まあ、要するにとてつもなく大きな場所ってことにしておくよ。在校生が3万人の大学の食堂なんだからでかいのも当然なんだが、学食は昼飯時でもないのにガヤガヤしている。

ここは昼飯を食べるだけの場所ではなく、だべるための場所でもあるのだ。

何処の大学もそうなんじゃないかと思う。

「星空のヤツ、人のことを呼び出しておいて、遅刻するとはなつてないぜ」

約束の時間になっても現れない星空に対して愚痴を言うと、

「まあまあ」

と言つて僕のことをなだめるのは、レインさんだ。本名は知らねえ。

この間、知り合いになった美人コスプレイヤー。

テレビとか雑誌でたまに取り上げられてるこの大学のチョットした有名人とのこと。

この間は小競り合いになってしまったが僕は気にしていない。こいつはどう思っているかは知らないが。

「でもレインさんが学食に居てくれて助かりましたよ」

「はあ？なんで？」

「いやあ、目印にするには調度いいんですよねえ。その銀色の頭」
「……」

どうも機嫌を損なつたようだ。無言で僕のことを睨んでいる。この間も髪の色の話で失敗している。

ここはうまくいってフォローしないと。

彼女は、コスプレイヤー！。

アニメや漫画好きのはず。それにちなんだ褒め言葉でうまくやれ

ば良い。

「いやあ、でもカッコいいですよその頭……【銀牙——流れ星銀】みたいで」

「犬じゃねえか!？」

「すぐく昔、確かジャンプでやっていた漫画のことだ。テレビアニメもやっていた。」

スゲー、昔だけど。

「あはは」

「そういえば、昨日も少年漫画の例えで失敗したんだった。」

「年代的に私に言っても解らないと思ったんだろぅが甘かったな!ぶっ殺す——!」

僕に殴りかかってくるレインさん。

「ギャー!」

僕はそんなベタな叫び声を上げ殴られる。

しばしの一方的な暴力が続き僕は我慢した。

彼女はある程度、僕をボコボコにして気がおさまったみたいだ。

このいやな雰囲気を変えないといけない。

ボコボコになった顔で気を使う僕。

「そう言えばレインさんって有名なコスプレする人なんですよ。スゴイな」

質問する。大して興味もないのだが、話す話題がないので。

「まあ、雑誌媒体やネットで取り上げられる回数が多いから、そういう意味では有名かもね」

「スゴイですね」

ただの目立ちたがり屋だろ？

絶対に口に出せないような事を思っていた。

「でも有名って意味では星空の方が有名だよ」

「ああ、自称探偵で女子高生のコスプレで大学の中を歩き回るような人間ですからね。ていうかいつもあんな格好しているんですか

？」

「いつもって訳じゃないけど、変な格好しているほうが多いわね。女子高生の他にはコンビニの店員、看護婦」

「そんな格好もしているんだ……いやあ、変っていますね」

お前の頭の色も十分変だけどな、と思ったが言わない。

余計な争いばかりしていると話が進まないからだ。

「まあ、変な格好で有名と言っわけじゃないんだけどね。彼女、ここの学校の理事長の娘なのよ。だから有名なの」

「は？」

「だから理事長の娘。だからみんな知ってる」

「え————ッ!？」

そういえば、一番最初に自己紹介された時に【雨宮】って言われたような気がする。お嬢様のイメージとはかけ離れていたので全く気づかなかった。

考えてみれば——この学校は雨宮グループの系列の大学だ。

「うるさい！」

僕の驚いた際の叫び声を聞いて、耳を塞ぐ。

「この学校の理事長と言えば、雨宮グループの会長じゃないですか」

僕は質問する。

雨宮グループと言えば超巨大企業だ。

何でもやってる。一般的な生活用品から軍事兵器まで。

この国に暮らしている人ならなんだかのカタチでお世話になっているだろう。

「そうよ。超が付く大金持ち。お嬢様の中のお嬢様」

「まじっすか!？」

「まじまじ」

「ちよつと待て！僕はその金持ちに、食事をおごったのか!？」

「……そういうことになるわね」

「クソー。割に合わん。今度、高級レストランで世界三大珍味が

入っているようなフルコース料理をおごってもらわないと」

「あんた…。モてないでしょ？」

「……」

「ウワツ。やっぱり図星だ」

馬鹿にしたような顔で僕の事を見つめる。

「なぜそう思う？」

この女は何を根拠にそんなことを言っているのか。
確認せねばなるまい。

「細かい」

「うるせーよ！」

余計なお世話だよ！

「あとすぐ怒るところとかも駄目ね」

トドメの一撃。

「お前だつてすぐキれるだろ！」

人のこと言えねえ。

「なんだと！」

「クソツ！やっぱり美人は駄目だ。みんながちやほやするから人間ができてない」

「美人差別だ！じゃあ、あんたは性格の良い美人と性格の悪い美人がいたらどっちと結婚するんだ！」

「性格のいい美人に決まってるだろ。ていうことはお前とは絶対に結婚しないってことだ！」

「そんなえらそうなこと言っておきながらやっぱり美形が好きなんじゃないか！」

「じゃあ、良いだろう。もっと解りやすく説明してやる。性格が悪い不細工とおまえしか選べない世界があるとしたら——僕は迷わず性格の悪いブスを選ぶってことだ」

「なにい！」

「それくらい僕はお前が大きっらいってことだよ！大体自分で自分のことをかわいいと思ってる人間に口クなやつはいねえ」

「ぶつ殺す！」

そんなやり取りをしていると星空が来た――

「またケンカしているんですか。仲良いですねえ」

そんなワケないでしょ。とレインさんが答える。

「やつと来たか……」

またもや僕はボコボコになっていた。

「お待たせしました」

「はッ!？」

そう言えばこいつは大金持ちだ。

取り入っておいたほうがいいのか。

就職が有利になるかもしれない。

この就職氷河期に――一年生の時から考えるのは早すぎるかもしれないのだけれど。

総合商社の雨宮だったらどんな仕事でも選びたい放題だぜ。

そんなことを考えていた。

これで僕も勝ち組。大手企業に入って天下りし放題だ。政府の關係者でもないのに。

「どうかしましたか？」

「いや、なんでもないよ！それより、どうぞイスにお座り下さい」
ぼくはそう言って学食のイスを星空が座りやすいように引いた。

「ありがとうございます。なんか気持ち悪いですね」

「アハハ、僕の長所は気が利くところなんだよ」

「いや、そんなこと誰も聞いてないんですけど」

「それと、チームワークを大切にします」

「なんで、いきなり面接の時言うようなテンプレートの会話しだすんですか」

「就職に対する心構えっていうのを何時でも意識して生活してい

るんだ」

「いや、まだ一年ですから私達」

学食2

「普段からの意識を持つのが大切なんだよ」

「へえ、偉いですねえ」

「まあね。ところで聞いたぜー。お前、理事長の娘なんだって！仲良くしてると就職に有利になったりするの？」

「うわあ、そこまで直球で媚び売ってくる人はじめてですよ」

「え、そう？」

「はい。まあいいですけど。就職先の口利き、してあげてもいいけど…一つ条件があります」

「なんだよ？」

「私と友達になって下さい——」

「……」

「……」

「悪いけど、そう言うことだったらこっちからお断りさせてもらうぜ」

「そうですか」

星空は目をつぶってうつむく。

表情がない。

「星空。友達ってのはさ——交換条件を出してなってもらうものじゃないよ。そんなもの友達じゃない」

「そうです…か」

「そうだ」

「はい」

「それに僕たちはもう友達だろ。お前はそう思ってなくても、もう僕は勝手に友達だと思っているぜ」

「……あ。はい、ありがとうございます」

「まあ、お金持ちのお前に取り入って就職を何とかしてもらおうって僕が悪かったよ。ごめん」

「いえ」

「ところでご飯食べないんですか？」

「今月分の食費が無くなってしまつて食えない」

「駄目ですよ。お金は計画的に使わないと」

「昨日のお昼ごろ、喫茶店で予定外の出費があつた」

「……へえ」

僕から顔をそらした。どうやら心当たりがあるらしい。

「……」僕は、ジトーツと彼女を見つめる。

「良かったら……」

「おごつてくれるのか？」

「いえ、おごりませんけど」

「じゃあ、なんだよ」

期待はずれじゃないか。

「実は私の仕事の助手を探しているんですけど……やってみませんか？」

「助手——」

昨日はなしていたアレだ。探偵つてヤツだ。

ホームズで言う所のワトソンだ。

「どうですか？」

「いやあ、残念だけど……」

探偵つて言つてもどうせ、学生気分のお遊びでやっているんだろ。悪いけどそんな事に付き合つてられない。

「時給千二百円出します」

「……残念だけど、残念だけとおおお」

…おい、まじかよ。なにその破格の時給。やるしかねえ。

僕の生活は貧窮している。

一人暮らし。で仕送り生活。実家は中流家庭で仕送りは正直足りねえ。

ちょうどバイトもしないといけないと思っていたところだ。
が、ポンポン領いてはいけない。

まだ交渉の余地がある。

もっと高い時給。

より良い環境。

理想的な労働時間。

「じゃあやめときますか？」

「まあ、待て。まだやらないとは言っていない」

「はあ」

「まずどんな仕事をするのかを聞きたい」

「だから助手です。探偵の」

「それは、解っている。もっと具体的に仕事の内容を知りたいんだが」

とは言ってもどうせお遊びみたいな内容なんだろう。

まあ、一応聞くだけ。

「そのときによって内容は変わりますからね」

「探偵というには危険な内容もふくまれるんだろ？」

「そうですね」

「それで時給千二百円と言うのは安すぎないかね」

「そうですね？ いやならやらなくてもいいですよ」

チッ！僕は心の中で舌打ちをする。

さすがに簡単には、時給は上がらないようだ。

では別の切り口で行くか――

「そういうことではなくて……どちらかというと僕は君がやっている探偵という仕事。いや、探偵をサポートする助手という仕事に興味が出てきた」

「それはよかったです」

――この女。

表情が読めないから、何を考えてるか解りにくい。
普通だったら。

僕の話に食いついてくれば、攻めの交渉に入るし。食いつきが悪ければいったん距離をとる。

会話の間合いがとりづらい。

こいつ強敵だ。

「探偵という仕事は危険が付き物だ。密室トリックを解決したり、殺人犯を追いかけたりする」

もちろんそんなこと現実的に考えてみるとあるわけがない。

犯罪者の相手は警察だ。だいたい犯罪解決に関する膨大なノウハウがある警察に、素人探偵など相手になるわけがないのだ。

探偵は検死だって出来ないし、指紋を調べる事だってできない。

警察は関係者を合わせれば、人数だって数え切れないほどのいるし、警察署は全国何処にでもある。

パトカーはサイレンを回せば、赤信号でも進めるし、制限速度も関係ないからスピード出し放題だ。

拳銃をぶつ放せば、一撃で人も殺せる。

言わば対犯罪者のエキスパート。

犯罪者を逮捕することは探偵の仕事ではない専門家の仕事だ。

そんなことは、百も承知で僕は尋ねた。

「はい、そうだったこともあるかもしれませんが」

「そこで僕は、この仕事に危険手当を要求する」

「危険手当？」

「そうだ。少しでも怪我の危険性があるような業務は、時給を二十パーセント上乘せしてもらおう。命が危険な時は……まあ、そんな事はめったに無いだろうけど——時給を倍にしてもらいたい」

命の危険にさらされる。そんなことあるわけがない。

そんなことは解ってる。おそらく怪我もしないだろう。だが怪我の危険性なんてものは何処にでも転がっている。

時給が倍になる状況なんてあるわけがない。

一般生活で死ぬなんて状況はないと言い切れる。

狙いは二十パーセント時給上乘せのほうだ。

危険性がある。なんてあいまいな表現だろう。あとで何とでも言える。

そんなモノは交渉次第だ。

「うーん……」

「どうかな？」

「解りました。正し条件があります」

やはりそんな簡単には僕の希望は通らないか。しかし、そんな事は想定済みだった。

だから、相手に少し無理な条件を提示したのだ。

「どんな？」

「あなたの言う事はもつともです。それでは怪我をしそうな場合は時給を倍にします。命に関わるようなことがあれば——またその倍にします」

「……オーケー。交渉成立だ」

エエエエエ……まじっすかッ！？

ウヒョー。

すげー。

さすが金持ち、太っ腹だぜ。

先程は強敵だと言ったが。そんなことは無かった。

ただのバカだ！

「他に何か質問はありますか？」

「まあ、たいしたことじゃないのだけれど労働時間はどうなるのかな？」

「え？」

「いや、何時から始まって何時で終了なんだろうか？」

本当は『探偵は常に危険にさらされるから一緒にいる時はずっと就労時間ってことでいいんだよな。ウヒヒー』と言いたいことなのだがそれはやり過ぎだろう。

さすがに悪い気がする。

探偵ごっこで貰う金額ではないだろう。

「私と一緒にいる時ずっとです」

ずっと一緒？その間ずっと金がもらえる。

ただのバカではない。すごいバカだった。

「そんなにもらって良いのかよッ!？」

「不満ですか？」

「いや、全然かまわねえけど。どれ位一緒にいるか解らんけど。さすがにそんなにもらったら悪い気がするぜ」

「かまいませんよ。そのかわり——使えないと思ったら、即クビにします。それで良いでしょうか？」

「お前がソレで良いならかまわないぜ。でも貰い過ぎたと僕が感じたら、その分は返金するからな」

「まあ、好きにしてください」

「……」

コイツ。金に執着がないんだろうか——ハア！。僕はこころの中でため息をついた。

こんなヤツから金は取れねえ。

これはきつとただ働きになるんだろうな。そんなことを考えていた。

研究所 雨宮

探偵って何するものなんだろう。

星空に聞いてみたら、こんな答えが返ってきた。

「この間、探偵の仕事はは、事件を解決したり、死にそうになったりすると言いましたが実際にそんなことになることはありません」

「じゃあ、なにすんの？」

僕がそう聞くと彼女は、

「探偵とは、いや探偵に限ったことではありませんけど……警察とかもそうです。基本的には地味です」と言う。

「まあ、漫画やテレビドラマなんかは脚色されているだろう。本物よりも、危険がいっぱいでハラハラ面白くないと話にならないだろうからね」

「その通り。実際の仕事なんかは足を使って情報をコツコツ集めるくらいですよ」

「じゃあ、僕のこととはあんまりなさそうだな」

「そうかもしれないね」

なんてことを話していたけど、実際はそんなに甘くなかった。

逆の意味で、ドラマみたいではないという期待を裏切られたんだ。見事に。

星空が仕事をもらいに行く所。

その時は僕も一緒に行ったのだ。

この大学、雨宮大学に隣接している研究所に仕事を調達しに行っ

た。

そこで聞いた内容はぶっ飛んでいた。

どんな風にぶっ飛んでいたかはこんな感じ。

「はじめまして」

僕が、懇切丁寧にそう挨拶すると、目の前にいた研究所の白衣の医師。

「研究員なのだろう、三十代位の男。」

「こちらは？」

星空に尋ねる。

「私の助手です」

「ああ、名探偵には付き物ですからね。ちょっと間抜けな語り部が――」

なんてことを言われた。

はつきり言うと、頭にきた。普通に。

「アハハハ、それで頼みたいことって何です？」

僕のこと、存在なんてお構いなしにその話題はスルーされた。

でも、話は続く。

「実はですね。うちの研究所で開発した新薬が盗まれてしまったのですよ！」

「警察に言えよ！」

僕はそんな当たり前の話を、この失礼な白衣の医師に言う。

「いやあ、間抜けですね」。警察に言えないから探偵に頼んでい
るんですよ」

「??？」

僕が疑問に思っていると、説明してくれた。

「この研究所は、普通のモノも開発していますが……普通じゃな

いモノも開発しています」

「普通じゃないモノ？」

「そう、例えば。いえもうここは例えません。今回盗まれたものは、軍事転用しようとした薬なんです」

「……ッ!？」

だいぶ物騒な話になってきた。ここの雰囲気ではそんな感じ全くないけど。

「もちろん。雨宮は巨大企業で、戦争関係の仕事が得意だから、国を通して警察に頼むことも可能なんですが……今回は避けたい」

その話を聞いて、星空が割って入ってくる。

「また、人道的にマズい研究をやってたのではないですか？」

「その通りです！今回の薬は相当ヤバイ！どんなモノか聞きたいですかあ??」

もったいぶる白衣の医師。

「事件に関係があるのなら聞かせていただきますよ」

「わかりました。なんと、今回の武器は、人の脳みそを直接スパコンにつないで情報共有させる薬です。かつこよくないですか？やばくないですか？」

「そんなことできるのかよ？」

僕がそう尋ねると、

「可能です。僕達は実験に成功しました！」

「その薬。聞いた感じだと、そんなに危なそうには聞こえないけど」

その話を聞いて星空は、

「そんなことないです。おそらく使った被験者はかなり悲惨なことになると思いますね」

——「その通り。情報量や他人の思考に人間の脳がついてこれず、薬を飲んだ人の頭は狂い、血を吐き、死んでしまう危険性があります」

「そんな……」

でも確かにそうかもしれない、僕一人分の脳みそだって処理し切れていないのに、ここに他人の思考が入り込んできたら耐えられないかもしれない。

「でも安心してください。徐々に技術が確立されようとしています。情報をスパコンに分散処理させるんですよ！」

その話を聞くが意味が解らない。

と言った顔をしていると、続けて教えられた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1598z/>

ホシノソラ

2011年12月22日05時06分発行